

パラノイアの病因における同性愛の役割について

シャーンドル・フェレンツィ

(訳・解題 花澤創一郎)

一九〇八年の夏、私はパラノイアの問題について、フロイト教授とより長い話し合いの中で検討する機会を得た。私たちは一定の期待表象 *Erwartungsvorstellungen* を確定するに至ったが、それらは本質的にはフロイト教授によって展開されたものであり、私は個々の提案や異論をもって、思考の筋道が最終的な形をとることに寄与した。私たちはまず、投影 *Projektion* という機制が——当時分析された唯一のパラノイア症例においてフロイトによって提示されたとおり——パラノイア一般を特徴づけるものであることを確認した。さらに私たちは、パラノイアの機制が、神経症と早発性痴呆 *dementia praecox* という相反する機制のあいだに、中間的な位置を占めるものだと仮定した。神経症者 *Neurotische* は、好ましくないものとなった自らの情動を、さまざまな移動 *Verschiebung* の様式(転換 *Konversion*・転移 *Übertragung*・置き換え *Substitution*)によって処理するのに対し、痴呆者 *Demente* はその関心 *Interesse* を対象から引き剥がし、それを自我へと引き戻す(自体愛 *autoeroticismus*・誇大妄想)。パラノイア者 *Paranoische* もまた、自らの関心 *Anteilnahme* を撤回することによってこれを試みようとするが、それはただ部分的にしか成功しない。欲望の一部はうまく自我へと引き戻される——誇大妄想はパラノイアのいか

なる症例にも欠けることがない——が、関心の多かれ少なかれ相当部分は、その本来の対象から離脱できないか、あるいはそこへと回帰してしまう。しかしこの関心は自我にとって相容れないものとなっているために、(情動反転、すなわち「負の符号 *negativen Vorzeichen*」を伴って)対象化され、自我の外へと排出される。したがって、耐えがたくなり、対象から引き剥がされたその傾向は、愛の対象の側から、その否定形 *Negativ* として知覚されるものとして回帰してくる。愛の感情から、その反対の感覚が生じるのである。

さらに観察を進めればこれらの仮定の正しさが裏づけられるであろうという期待は、充たされた。(「アルフォンス・」メーダー *Maeder* が『精神分析・精神病理学研究年報』第二号に公表したパラノイア性痴呆 *paranoïder Demenz* の症例は、フロイトの仮定を広い範囲にわたって確認するものである。フロイト自身も、さらなる研究を通じて、パラノイアのこの基本公式のみならず、われわれがさまざまなパラノイア型の心的機制において想定していたいくつかのより精緻な細部についても、確認を与えることができた。

しかしながら、本稿の目的は、パラノイア問題全体を詳しく検討すること(それについてはフロイト教授自身がより大規模な研究を捧げている)ではなく、むしろ、前述の期待表象を超えて、二、三のパラノイア患者の分析から私に明らかとなった一つの経験的事実を報告することにある。

すなわち、これまでの観察によれば、パラノイアの機制は、あらゆる可能なリビドー備給を防衛するために作動するのではなく、同性愛的対象選択に対してのみ向けられている、ということが判明したのである。

すでにフロイトによって分析されたパラノイア患者の症例においても、同性愛はきわめて顕著な役割

を果たしていたのであり、それは当時、著者自身によってもなお十分に評価されていなかったものであった。⁽²⁾

また、パラノイア性痴呆患者を対象としたメーダーの研究においても、ある一人の患者の迫害妄想観念の背後に、「疑いえない同性愛的傾向」が見いだされている。

しかしながら、以下に報告するいくつかの症例の観察は、次のような仮定を正当なものとして生じさせる。すなわち、同性愛はパラノイアの病因 Pathogenese において偶然的な役割を果たすのではなく、むしろ最も重要な役割を担っており、さらに言えば、パラノイアとはおそらく、歪曲された同性愛 entstellte Homosexualität 以外の何ものでもないのではないか、ということである。

I

最初の症例は、私自身の女中の夫に関するものであった。彼はおよそ三十八歳の頑健な人間であり、私は数か月にわたって、彼をきわめて詳細に観察する機会をもった。

彼と、その美しいとは言いがたい妻は、私のもとで働き始める直前に結婚し、私の住居の一角の、一部屋と台所から成る区画に住んでいた。⁽⁴⁾ 男は日中職場で働き(彼は王立郵便局の職員であった)、夕方にはきちんと帰宅し、当初は何ら不満を抱かせるようなきっかけを示さなかった。それどころか、彼はその並外れた勤勉さと、私に対する非常な礼儀正しさによって、私の注意を引いた。彼はいつも私の部屋の

どこかに、掃除したり美しく手入れをしたりすべき箇所を見つけた。私はときに深夜になっても、彼が扉や床に新しくニスを塗ったり、手の届きにくい上部の窓ガラスを磨いたり、あるいは浴室に何らかの器用な改良を施しているのを見かけたことがある。彼は私を満足させることに非常な重きを置き、私の指示のすべてに対して、軍隊的とも言えるほどの規律正しさと時間厳守をもって従ったが、その一方で私からのいかなる批評もきわめて過敏に受け取った。しかし、そのような批評の必要が生じることは、実際にはごく稀であった。

ある日、女中が涙ながらに、夫との生活が非常に不幸であると私に打ち明けた。近頃、夫は酒量が増え、帰宅も遅くなり、理由もなく絶えず彼女を叱責し、罵倒するというのである。私は当初、この夫婦間の問題に介入するつもりはなかったが、偶然にも、彼が妻に暴力を振るっていることを知った（このことは、職を失うことへの不安から、妻が私に隠していた）。そこで私は彼に厳しく抗議し、禁酒と妻への温和な扱いを要求したところ、彼は涙ながらにそれを私に約束した。私が右手を握手に差し出すと、彼が私の手に激しく口づけるのを、私は止めることができなかった。しかし当時の私は、これを彼の感情の高ぶり、私自身の「父親的」態度の結果であると見なした（もっとも、私は彼より年少であったのだが）。

この場面のうち、家の中にはしばらく平穏が保たれた。しかし、わずかな数週間のうちに同じような場面が再び繰り返されるようになり、そこで私は改めてこの男を注意深く観察した結果、彼に慢性アルコール中毒の徴候を認めた。そこで妻に詳しく問いただしたところ、彼女が夫から継続的に、しかもまったく根拠なく、婚姻上の不貞を疑われていることを聞き知った。当然ながら、私のうちにはただちに、これは夫のアルコール性嫉妬妄想であるという疑いが生じた。というのも、私はこの女中を、きわめて貞淑で、きわめて慎ましやかな人物として知っていたからである。再び私は、男を酒から遠ざけ、家庭内

の平和をしばらくのあいだ回復させることに成功した。

しかし、ほどなくして悪化が生じた。事態はアルコール性パラノイアであることが明らかとなった。

男は妻を顧みなくなり、酒場で真夜中まで飲酒した。帰宅すると、彼は妻に暴力を振るい、絶えず罵倒し、さらに、私のもとを訪れるあらゆる患者と妻とを結びつけて、不貞を疑った。後になって私は、彼がこの頃すでに私に対しても嫉妬を抱いていたことを知ったが、これは、私に対するもっとな恐怖心から、妻がそれまで隠していたのであった。私は当然ながら、この夫婦をこれ以上自宅に置いておくことはできなかったが、妻の懇願に応じて、四半期の満了までは彼女をその職に留めることを約束した。

この時になって、私はようやく、それらの家庭内で起きていた出来事の細部をすべて知ることとなった。私が男を呼び出して問いただすと、彼は、目撃者によっても確認されていたにもかかわらず、妻に暴力を振るったことを断固として否認した。彼は、妻は「白い肝臓をもつ女」、すなわち、「男の精力を吸い尽くす」一種の吸血鬼であると主張した。彼は妻と毎晩五、六回も性交しているが、それでもなお彼女は満足せず、誰とでも交わるのだ、というのである。このやり取りの最中にも、先に述べたあの感動的な場面が再び繰り返された。彼は再び私の手をつかみ、涙を流しながらそれに口づけした。そして、私ほど愛すべき、親切な人間をこれまでに見たことがないのだ、と主張したのである。

この症例が私の関心を精神医学的にも引きはじめた頃になって、私は妻から、夫が結婚式以来、彼女と性交を行ったのは実のところ二、三回にすぎないということを知らされた。ときおり彼は実施を試みることはあるが——その多くは後背位 a tango であり——やがて彼女を突き放し、罵声を浴びせながら、彼女は娼婦 Hine であり、誰とでも性交できるのに、自分とだけはできないのだ、と言い立てたという。私は次第に、彼の妄想内容の中で、ますます大きな役割を占めるようになっていった。彼は、妻に対

して刃物で刺すと脅しつつ、彼女が私と性的関係をもったという自白を強要しようとした。毎朝、私が外出すると、彼は私の寝室に侵入し、私の寝具の匂いを嗅ぎ、そこで妻の匂いを嗅ぎ取ったのだと主張して、その後で妻を殴打した。私が休暇旅行から「男の」妻に土産として持ち帰ったスカーフを、彼は暴力的に奪い取り、毎日何度もそれを撫で回した。また、私が彼に贈ったタバコのパイプからも、彼は片時も離れなかった。私がトイレに入ると、彼はいつも前室で耳を澄まし、聞こえたことを卑猥な言葉で妻に語って、「それが気に入ったか」と問いかけた。そして私の直後に便所へ駆け込み、私がすべてを「きちんと水で流したか」どうかを確かめたのである。

こうした一切の行動にもかかわらず、彼は考えうるかぎり最も熱心な使用人であり続け、私に対しては度を越したほどの愛想の良さを示していた。彼は、私がブダペストを留守にしているあいだに、私の指示もないままトイレを油性塗料で新しく塗り直し、さらには壁に色付きの線まで描き加えた。

しばらくのあいだ、行われるべき解雇は、彼には伏せられていた。しかし彼がそれを知るに及んで、彼は抑うつ的となり、完全に飲酒に溺れるようになり、妻を罵倒し殴打し、さらに、彼女を路上に放り出し、私——「彼女の寵愛の対象」——を刺し殺してやる、と脅迫した。それでもなお、彼は私に対しては礼儀正しく、従順な態度を保っていた。しかし、彼が夜間、鋭く研いだ台所用ナイフを手元に置いて眠っていること、さらには一度、実際に私の寝室へ侵入しようとする本気の構えを見せたことを知ったとき、私は、解雇予告期間の満了までに残されていた二、三日をもはや待つことができなかった。妻は当局に通報し、当局は、自治体医師による診察結果にもとづいて、彼を州立精神病院へ収容した。疑いなく、この症例はアルコール性嫉妬妄想に属するものである。しかしながら、私に向けられた同性愛的転移の際立った特徴は、この男性が他の男性たちに向けた嫉妬が、実のところ、彼自身の男性的

性に対する性愛的な好意の投影にはかならなかった、という解釈を可能にする。また、彼が妻との性交を忌避していたことも、単なるインポテンツによるものではなく、むしろ彼の無意識的同性愛によって規定されていたものと考えられる。明らかにアルコールは——これを検閲毒 *Zensurgift* と呼んでも差し支えないであろうが——、彼の友情性・奉仕性・従順性として精神化されていた同性愛から、その昇華を大部分において(ただし完全にはないが)剥奪し、その結果として現れた粗野な同性愛的エロティク *Erotik*——それ自体としては倫理的に高度な人間の意識にとって耐えがたいもの——を、単純に妻の側になすりつけたのである。

私の考えでは、ここでアルコールが果たしている役割は、ただ昇華破壊者としてのそれにすぎない。その作用によって、この男性の真的性的体質、すなわち同性的対象選択が明るみに出たのである。

この解釈を確証する確かな証拠は、私が後になってはじめて得たものである。私は、彼が数年前にすでに一度結婚していたことを知った。その最初の妻とも、彼はごく短期間しか平穩に暮らさず、結婚後まもなく飲酒を始め、やがて妻を嫉妬の場面によって苦しめ、罵倒するようになり、ついには妻が彼のもとを去り、ほどなくして裁判上の離婚を成立させるに至ったのである。

二度の結婚のあいだの期間、彼は節度があり、信頼できる、しらふの人物であったとされており、第二の結婚後になってはじめて再び飲酒を始めたのである。

したがって、アルコール依存がパラノイアのより深い原因であったのではない。むしろ、彼の意識的な異性愛的欲望と無意識的な同性愛的欲望とのあいだに存在する解決不能な葛藤のなかで、彼はアルコールに手を伸ばしたのであり、それによって、昇華の破壊を通じて同性的なエロティク *Erotik* が出現したのである。そして彼の意識は、この同性的なエロティクを、投影——すなわち嫉妬妄想という経

路を通して処理したのである。

しかしながら、昇華の破壊は完全なものではなかった。彼は、自身の同性愛的傾向の一部をなお精神化された形態において、すなわち主人に対する愛情深く従順な召使として、また職場における規律正しい部下として、さらには両方の立場における有能な労働者として、活動させることができていた。しかし、状況がより高度な昇華能力を要求する場面——たとえば寝室や便所に関わる作業においては——、彼は自らの欲望を妻に委託させざるをえず、嫉妬の場面を演じることによって、自分が妻に恋しているのだと自ら保証を得る必要があったのである。妻に対する途方もない性的能力を誇示することもまた、自己鎮静に資する事実の歪曲の一つであった。⁽⁵⁾

II

第二の症例として、私は、まだ若い婦人のそれを挙げたい。この婦人は、夫と何年にもわたりかなり円満に暮らし、夫に娘たちを産んだのち、息子の誕生からあまり時を置かず、嫉妬妄想に罹患した。彼女の場合には、アルコールは何の役割も果たしていなかった。⁽⁶⁾

彼女は、夫に関してはあらゆることを怪しく思うようになった。料理女も女中も一人また一人と追い出され、ついには家では男性の使用人だけが容認されるようにと彼女は押し通した。しかしそれでも効かなかった。一般に模範的な夫と見なされ、私に対しては神に誓うようにこれまで一度も夫婦の貞節を

破ったことはないと言いつ張っていたその夫は、妻に見張られ、疑われ、いや、罵倒されずには一歩も歩くことも一行書くこともできなかった。奇妙なことに、彼女が夫を疑う相手はつねにごく若い、十二、十三歳の少女か、あるいは全くの老女で醜い女たちであった。それに対して、社交界の婦人たちや、女友達、あるいはより良い女家庭教師たちに対しては、たとえ魅力的であったり美しかったりしても嫉妬することはなかった。こうした女性たちとは彼女は友好的に交際することができたのである。

とはいえ、彼女の家庭での振る舞いはますます目立つようになり、脅しは危険性を増したため、彼女をサナトリウムに収容せざるを得なかった(入院前に、私は患者をウィーンのプロイト教授にも相談させたが、彼は私の診断と分析の試みを是認した)。

患者の途方もない不信と鋭敏さを前にしては、彼女と接触をもつのは容易ではなかった。私は、あたかも夫の無罪を完全には確信していないかのような立場を取らねばならず、そうすることで、ふだんは誰にも心を開かないこの患者に、これまで隠していた妄想観念までも私に打ち明けさせることができたのである。

これらの妄想の中には、明白な誇大妄想および関係妄想が含まれていた。地方新聞の行間には、彼女のいわゆる道徳的墮落についての示唆や、裏切られた妻としての彼女の滑稽な立場についてのほめかしが満ちており、記事はすべて彼女の敵対する女たち Feindinnen が新聞記者に依頼して書かせたものだ、というのである。さらに、最高位の人物たち(たとえば司教座の宮廷なども、これらの企みを知っており、その年にちょうど彼女の住居近くで行われた国王の軍事演習も、これらの敵対者の何らかの秘密の意図と無関係ではない、と彼女は言う。後の会話のうちに、この「敵対する女たち」とは、解雇された召使であることが明らかになった。

私はその後しだいに彼女から、彼女が当時、両親、特に父親の希望によって、夫の求婚をしぶしぶ受け入れたにすぎなかったことを知った。当時、彼女には彼があまりに平凡で、洗練されていないように思われたのである。しかし結婚後には、彼女はしだいに彼に慣れたのだとされている。第一子である娘の誕生後、家の中で奇妙な場面が起こった。夫は、彼女が自分に息子を産まなかったことに不満を抱いたらしく、また彼女自身もそのことにまぎれもない良心の呵責を感じた。その結果、彼女の中には、自分がこの男と結婚したのは正しかったのかという疑念が生じた。同じころ、彼女は十三歳になるといって、非常に美しいとされた補助の女中に対して嫉妬し始めた。彼女はまだ産褥期にあったが、その少女を一度自分のところに呼びつけ、ひざまずかせ、父親の命にかけて、主人がその子に何もしていないと誓わせた。この誓いはひとまず彼女を安心させた。彼女は自分が誤解していたのかもしれない、と考えたのである。

息子がようやく生まれた後、彼女は、夫に対する自分の義務を果たし、これで自由になったかのように感じた。彼女の中には、二面的な振る舞いが始まった。彼女は夫に対して再び嫉妬深くなったが、他方で男性に対してときに目立つような振る舞いをすることもあった。「もつとも、目だけでですけれど」と彼女は言った。しかし誰かが彼女の合図に従おうとすると、彼女はいつもきっぱりとその者を退けた。こうした「無害な遊びごと」は、彼女の「敵対する女たち」によってもまた誤って解釈されたが、まもなくますます悪化してゆく嫉妬の情景の背後にかき消されていった。

夫を他の女性に対して不能にしておくと、彼女は毎晩何度も夫に性交を行わせた。しかも彼女が一瞬、(身体的な用を足すために)寝室から離れるさい、彼女はその後ろで部屋に鍵をかけた。彼女はすぐに戻ってきたが、もし寝具に少しでも乱れを見つけると、夫を疑った——すなわち、解雇された料理女

が鍵を作らせておき、その間に彼のもとへ来ていたのだ、と。

ご覧のとおり、この女性患者は、先に述べたアルコール・パラノイア患者がただ空想するだけで実行することのできなかった性的な飽くなき欲望 *geschlechtliche Unersättlichkeit* を、実際に具現化していた（もっとも、女性も男性よりもはるかに、実際の欲望がなくとも、性交の回数を意のままに増やしうるのである）。また、寝具の状態に対する厳格な監視という点も、ここで繰り返して現れた。

サナトリウムにおけるこの患者の振る舞いは、きわめて矛盾に満ちていた。彼女はすべての男性に媚びたが、しかし誰ひとり近づくことは許さなかった。その代わり、彼女は館のすべての女性住人たちと濃密な友情や敵対関係を結んだ。彼女が私と交わした会話は、その大部分がこの女性たちのことを中心にしていた。彼女は指示されていたぬるま湯の入浴を大変好んで受けたが、その入浴の機会を利用して他の患者たちの肥満や体型について綿密な観察を集めた。彼女は、重病の年長患者のしわだらけの腹の皮膚について、嫌悪と忌避感のあらゆる表情を伴って私に語った。しかし、より美しい患者の観察談をするときには、彼女の顔に浮かぶ好色な表情は見逃しがたかった。ある日のこと、彼女がその若い患者たちと一緒にいた際に、「ふくらはぎの展示会 *Wadenausstellung*」を催し、自分がその競争で一等賞を取ったのだと主張した（ナルシズム）。

大きな慎重さをもって、私は彼女の性的発達における同性愛的要素について何か知ろうとし、彼女に多くの若い娘たちのように友人の少女たちを情熱的に愛したことがあるかどうか尋ねた。しかし彼女はすぐに私の意図を見抜き、私を乱暴に拒絶し、自分に嫌なことを吹き返もうとしていると主張した。私は彼女をなだめることに成功し、その後、彼女は絶対に秘密を守るという約束のもとに、幼い子どもであった頃、数年間にわたり、ある少女（彼女をその行為に誘った相手）と互いにマスターベーションをして

いた、と告白した(患者には姉妹しかおらず、兄はいない)。さらに、患者が語る(とはいえ次第に乏しくなる)諸々の報告からは、母親および女性の養育者に対する過度に強い性的固着の徴候を読み取ることができた。

患者の比較的穏やかな状態は、夫の訪問によって初めて深刻に乱された。嫉妬妄想が再び燃え上がったのである。彼女は、夫が自分の不在中にあらゆる種類の悪行に及んでいたのではないかと疑った。とりわけ、彼女の疑いは、——彼女が耳にしたところによると——掃除を手伝ったという年老いた管理人の女に向けられた。性的接触の場面では、彼女はますます飽くことを知らなくなった。夫が性交を拒むと、彼女は夫を殺してやると脅した。彼女は一度、本当に彼に向かってナイフを投げつけたことさえあった。

当初まだわずかに残っていた、医師への転移の痕跡も、こうした嵐のような時期には、次第に激しさを増す抵抗へと後退していき、分析の見通しはゼロ地点へと沈んでしまった。そこで私たちは、患者をより遠方の施設へ、より厳重な監督のもとに移送せざるを得ないと考えた。

この嫉妬妄想の症例も、本人が同性に向けていた好意を男性へ投影したものと考えるならば、はじめて理解可能となる。ほとんど女性だけの環境で育ち、幼少期から女性の養育者に強く固着し、さらに同年代の少女と長年にわたり性的な交流をもっていた少女が、突然「粗野な男 *unfeinen Manne*」との形式的な結婚へと強いられる。彼女はこれを受け入れるものの、ただ一度、夫の際立った不親切に対して憤りを示し、その際、欲望を幼少期の理想像(ある若い家政婦)へと向ける。しかしこの試みは失敗し、彼女はもはや自身の同性愛的傾向に耐えられなくなり、それを男性へ投影せざるを得なくなる。これが最初の短い嫉妬発作であった。そして彼女が「義務」を果たし、夫の求める息子を出産すると、ようやく自

由になったと感ずるのである。それまで抑えつけられていた同性愛的傾向は、昇華の可能性をまったく与えない（ごく若い少女、老女、女中といった）あらゆる対象を、粗野で露骨な性的形態のもとに激しく支配し始める。しかし、このエロティックの全部は、彼女がそれを見無害な遊戯の仮面の下に隠しうる場合を除き、男になすりつけられる。こうした虚偽を自ら強めるために、患者は、もはや自分にとってほとんど無関心になってしまった男という性に対して、いっそう誇張された媚態を示さざるをえず、まるでニンフォマニアックな女のようにふるまうのである。

III

ある日、私はある弁護士から、彼の依頼人——X市の法律顧問で、郷里の同胞たちから不当に迫害されていると訴えている人物——を診察し、健康であると証明してほしいと依頼された。この男はまもなく私のもとを訪れた。彼が大量の新聞の切り抜き、書類の写し、そして彼自身が作成したビラ類を、番号まで振り分けて見事な秩序で私に差し出したという事実だけで、私はすでに疑いを抱いた。文書にざっと目を通しただけで、彼が迫害妄想のパラノイア患者であることを私は確信した。私はいったん翌朝に正式の診察を予約したが、彼の書類を読み通しただけで、彼のパラノイアには同性愛的な根があることが示されたのである。

彼の争議が始まったのは、彼がある大尉に書面でこう知らせたことからであった。すなわち、向かい

の部屋に住む者、すなわち某連隊の一将校が「窓辺で、時にはシャツ姿で、時には上半身裸になって髭を剃っている」というのである。「第二に、彼は紐に手袋を掛けて窓辺で干しており、私はそれを小さなイタリアの村々で見たことがあるようなやり方で行っている。」患者は大尉に対し、「これらの不都合の是正を図っていただきたい」と要請した。大尉からの拒否的な返答に対し、彼は攻撃をもって応じた。その後、これに続いて大佐に対する告発があり、その中で彼はすでに相手方の「パンツ Unterhosen」にまで言及している。また彼は、例の手袋の件についても繰り返し苦情を述べている。巨大な文字で彼はこう強調する——もし自分が通りに面した部屋に妹といっしょに住んでいなければ、この件は自分にとってどうでもよいことであろう、と。「私はこの淑女に対して騎士道的義務を果たしているのだと思う。」同時に、彼の文書には恐るべき過敏さと、あらゆる誇大妄想の徴候が認められる。

後期の文書においては、その「パンツ」への言及が次第に頻繁になっていく。太字の大文字によって「婦人の保護」という語がしばしば強調されている。

ある追伸的な陳情書には、彼が前回の陳情書において書き忘れていたとして、件の中尉が夜になると、ブラインドを下ろさぬまま、明るく照らされた窓辺で着替える習慣がある、という追記がなされている。「私自身にとってはそれはどうでもよいことなのだが（この部分は小さな活字で記されている）、しかし私は、ある婦人の名において、このような光景からの保護を要請せねばならないのである。」

次いで、軍司令部、国防省、内閣官房などへの申請書が続くが、いずれの文書においても、「シャツ」「パンツ」「上半身」などの小さな活字の語句だけが——それらのみが——事後的に赤線で下線を引かれている（この患者は新聞の所有者であり、心ゆくまで何でも印刷させることができる）。

軍司令部のある公式文書によって、この患者の父と兄は、ともに精神錯乱 *Wahnsinn* の状態のまま自

殺して命を絶ったことが明らかになった。父は、患者自身の表現によれば「州の顧問弁護士にして雄弁家 Orator」であった（なお患者自身も弁護士である）。兄は中尉であった。さらに、患者はクナイプ主義者（一九世紀ドイツの司祭セバスチャン・クナイプが創始した自然療法をクナイプ療法と言う）であり、あるとき知事 Obergespan の謁見に、サンダル履きの裸足で現れ、そのため譴責を受けたということもわかる（露出症的行為 Exhibition か?）。

その後、彼はこの問題を騎士道的な方法（決闘による決着）に持ち込もうとしたが、決定的な瞬間になると、彼が完全に熟知している決闘規約の何らかの条文を持ち出して、いつも逃げてしまう。彼はこの場で、半ば意図的な誇張をしよう。つまり、まるで自分の手紙が將校に対する暴行同然の侮辱であったかのように話すのである。しかし別の箇所では（巨大な文字を使って）、自分はその將校に対して、最も配慮した形で、ただ事実だけを述べただけだ、と彼は主張している。さらに彼は、軍当局が彼自身について持っている、「好奇心の対象を発見すること以外、何もすることのない老女のような存在だ」という見方を、当局の側にこっそりなすりつけている。彼はまた、外国では、往來で少女を侮辱する將校がどのように処罰されているかについて、無数の例を引き合いに出す。そしてそもそも、無防備な女性たちを、粗暴な攻撃から守るための保護を要求するのである、など。さらに彼は、自分の提出した陳情書の一つの中で、冒頭に言及したあの大尉が、「怒りに満ち、しかもこれ見よがしに、自分から顔を背けた」と不満を訴えている。

彼が起こした訴訟の数は、雪崩のような勢いで増え続けていった。なかでも彼を最も激しく苛立たせているのは、軍当局が彼の申し立てを無視し続けることだった。彼は、民間人なら民事裁判所へと引きずり込み、やがて問題を政治の領域へとすり替え、自分の新聞で兵士と市会議員とを互いに扇動し合せ、

ハンガリーの文民官僚に対しては「汎ゲルマン主義者」を演じてみせた。すると実際、まもなく百人近い「同志」が名乗り出て、公の場でも書面でも彼に喝采を送るようになった。

そのあとに、ひととき奇妙な一件が起こる。

ある日、彼は別の将校について新しい大佐に苦情を申し立て、その将校が路上で彼の妹に向かって「ふん、いやらしいザクセン女め！」と叫んだのだと告発した。その姉妹がその事実を手紙の中で確認しているが、その手紙はほぼ確実に患者本人が書いたものであった。

彼はやがて新聞記事に頼るようになり、「危険な」箇所を点で伏せ字にすることで、容易には解けない謎を提示するようになった。たとえば彼は、フランスのあることわざについて、それをドイツ語に訳すと「das L..... t.....」になるのだ、と語る。私はそれが「[Lächerliche tötet (滑稽なものは人を殺す)](元の諺は Le ridicule tue : 一度笑う者になつたらおしまいだ、立ち直れないの意)」であると突き止めるのに苦労した。

第一大尉に対する新たな告発では、「しかめ面、身振り、動作、挑発的な視線」などが挙げられている。本人としては気にしないつもりだが、しかしこれはある淑女 eine Dame に関わる問題なのだという。その将校は子どもっぽい bubenhaft 人物であり、彼とその妹は、容赦なく彼に自分たちの立場をはっきりさせてやるつもりだ、と述べている――。

その後も新たな名誉攻撃が繰り返されるが、患者はそのたびに弁護士の小細工を用いて決闘規約を持ち出し、撤退するのである。

次いで、脅迫状が続く。そこでは彼が姉妹と同様に「自力救済 Selbsthilfe」について多く語り、長々とした説明を加え、決闘についての引用を百も並べ立てる、等々である。たとえば、「弾丸が殺すので

はない、劍の切っ先が殺すでもない。殺すのは介添人である」といった具合である。「男 Mann」「男たち Männer」「男らしい manhaft」といった語が、繰り返し現れる。彼は市民たちに、自分を讃える賛歌に署名させるが、それらの文章の実際の作者は彼自身である。ある時には彼は皮肉を込めて、人々はおそらく、自分が「あの紳士たちの手足に、へつらいとして接吻すべきだ」とでも望んでいるのだろう、と主張する。

次に、市当局との闘争が始まる。そこに対して軍が働きかけたのである。四十二名の市会議員が彼の処罰を要求する。彼はその中から、ダーヒンテン Dahinten という名の一人を名指しで選び出し、血を見るまで bis aufs Blut(「徹底的に」公然と追及する。ウィーンのある扇動的新聞による賛同表明や「ヴァッカー!」[「叫び」]という叫びに励まされて、彼は副県知事 Vizegespans の職に応募し、落選という不当な結果について、世界中すべてに責任を押しつける。もちろん彼は、反ユダヤ主義 Antisemitismus の領域でも活動する。

ついにその件は、より上位の文民当局のもとへ持ち込まれ、その当局は患者の精神状態を調査させた。彼は、私が彼を健康だと宣言してくれるだろうという希望を抱いて、私のところへやって来た。

パラノイア患者たちに関するこれまでの経験は、この症例において、同性愛が果たしているきわめて重要な役割を、すでにこれらの事実から推定することを、私にとって容易なものにした。迫害妄想 Verfolgungswahnes の発現——これまではおそらく潜在していた——は、半裸の一人の将校を目にしたことによって引き起こされ、さらにその将校のシャツ、パンツ、手袋もまた、患者に強い印象を与えたようである(私は、先に言及した二人の嫉妬妄想患者における寝具 Bettwäsche の役割を想起させたい)。女性が告発されたり非難されたりすることは決してなく、彼が争い、口論するのは常に男性、しかも多くの場

合、将校や高位官職者、すなわち上司たちである。私はこれを、彼自身の同性愛的な嗜好が、否定的な符号 *Vorzeichen* を伴ってそれらの人物へ投影されたものとして解釈する。自我から排除された彼の欲望 *Begehrte* は、無意識的嗜好の対象である人物たちから向けられる迫害傾向の知覚として、再び意識のうちへ回帰するのである。彼は、人々が自分を憎んでいるのだという確信に至るまで、探し続ける。このとき彼は、憎悪という形をとって、自身の同性愛を生きることができ、しかも同時にそれを自分自身から隠すことができるのである。将校や官吏から迫害されることが選好されるのは、父が官吏であったこと、兄が将校であったことによって規定されていたのであろう。私は、彼らこそが、彼の同性愛的空想における本来的で幼児的な対象であったのではないかと推測する。

アルコール妄想者における虚構された巨大な性力 *Potenz* や、嫉妬パラノイア者に見られる偽装されたニンフォマニアに対応するものとして、この場合には、誇張された騎士道精神と、彼が男性たちに対して女性に向けて示すべきだと要求する繊細さとが現れている。私は同様のことを、大多数の明白に同性愛的な男性においても見いだした。このような女性に対する高度な敬意は、同性愛者が——多くの心理的インポテンツの人々と同様に——女性を愛の対象とすることができないことの一部分をなしている。同性愛者は「女性を高く尊重する」が、しかし愛するのは男性である。われわれのこのパラノイア者も同様であり、ただし彼の場合、その愛は情動反転 *Affektverkehrung* によって、被害妄想と憎悪へと変換されてしまっているのである。

彼が自らの姉妹を、侮辱された当事者として前面に押し出していることは、しかしまた、彼がその姉妹と同一化しているような受動的同性愛的空想によっても理由づけられているであろう。このことを裏づけるのは、彼の訴え、すなわち人々が彼を、裸の将校やその下着の中に自らの好奇心の対象を探し求

める老女 *alte Frau* であると思われている、という彼の訴えである。したがって、彼が執拗に、自分を迫害する男性たちから受ける侮辱について訴えるとき、彼が無意識のうちに意味しているのは、性的攻撃であり、その対象に彼自身になりたいと欲しているのである。

この症例においては、労苦をもって築き上げられた同性愛の社会的昇華が、おそらくは増殖する幼児的空想の圧力のもとで、あるいはまた私には不明の他の機会要因につづいて崩壊し、妄想観念の中で、これらの精神化 *Vergeistigungen* の幼稚かつ倒錯的な基盤（例えば、視視 *Voyeurismus* や露出）が突破して現れてくる様子を、はっきりと見ることができる。

本症例に関する私の見解を検証するために、私は患者に対して、ユング図式の百の刺激語に対する反応を採取し、その連想を分析した。この分析において教示的であったのは、その成果がきわめて乏しいものであったという点である。パラノイア者は、自分を煩わせる情動をきわめて徹底的に排除してしまうため、それらの情動は——彼自身がそう信じているように——もはや自分にはまったく関係のないものとなる。そのため、彼は、自らの行為や発言の中で、ヒステリー患者が良心的不安から深く抑圧しているような事柄を、すべて語ってしまうのである。さらに注目すべき点、そして真正のパラノイアに特有であることが明らかな点として、ユングのいう「コンプレックス指標 *Komplexmerkmale*」のうち、再生障害 *gestörte Reproduktion* がほとんどまったく認められないという事実が挙げられる。患者は、コンプレックスに近接した「批判的 *kritischen* な」刺激語に対する反応についても、きわめて良好に想起する。投影は、パラノイア者を情動からきわめて有効に守るため、彼はヒステリーに見られる健忘 *Amnesie* を必要としないのである。ここでは、コンプレックスへの近接は、むしろ多弁さや自己関係づけ *Eigenbeziehung* によって露呈しているように見える。総じて、反応は一樣に自己中心的である。音韻

反応や脚韻反応、さらには機知的反応も非常に頻繁に見られる。以上が形式的側面についてである。以下では例として、個々の反応と、それに続く分析とを提示することにした。

Rw : 料理 Kochen。Ra : 男料理人、女料理人。A : 料理は Rw 「女 Weib」を Ra 「口やかましく喧嘩っ早く」zänkisch」させる。女はかまどのところで燃え立たされ inflammiert、熱せられる(興奮させられる) erhitzt。母もまた熱せられていた(興奮していた)。今日であれば、私は彼女に料理をさせないだろう。男のほうがるかに多くのことに耐えられる。もともと、ゲートは「七人の男でも、一人の女が耐えることには耐えられない」と言っている。私の母は六人の子どもを産んだ。「出産には男のほうがり、適しているだろう」(この反応には、女性を庇護する態度と男性を過大評価する傾向とが見いだされ、さらに「男として子どもを産む」という空想が付け加わっている)。

Rw : 川 Fluss。Ra : 川の中で入浴したい。A : 私は入浴が情熱的に好きである。従兄とともに、十月まで毎日、川の水で入浴していた。この従兄は過労のために拳銃自殺した。私は過労を避けているので、女性とはあまり交際しない(女性からの性的離反を、衛生的理由によって正当化しようとする試み。この従兄は将校 Offizier じゃあ)。)

Rw : 塩 Salz。Ra : 塩は結婚の塩 Salz der Ehe を思い起こさせる。A : 私は結婚に敵対的である。そこには日々の「摩擦 Reibungen」がある(彼はおそらく、結婚における性交の強制 Koituszwang も意味している)。

Rw : 書体 Schrift。Ra : 「……ベルリンの、すでに亡くなった芸術家で、美術工芸の創立者のものが気に入っている。……エックマンという名だ……」A : このように記念碑的で、目立つ書体が私には好ましい。父の書体のようである。私の書体も父のものに似ているが、それほど美しくはない。しかし私の文字 Buchstaben もまた大きい(父に対する敬意とその身体的優越性への評価が、しばしば見られるように、

父の書体(筆跡)Schrift を模倣しようとする傾向として表れている。「文字の大きさ」への嗜好は、象徴的に解釈されるべきであらう)。

Rw : コルク Kork。Ra : 「シャンパンの際に破裂音効果 Knalleffekt を生じさせる。」A : 自然は、女性に関して破裂音効果を狙っている。しかしその後には衰退がやって来る。父は高齢に至るまで美しかった。

Rw : 打つ〔殴る〕Schlagen。Ra : 控えめに言っても、私の敵どもは殴打に値する。A : 本当は、彼らを火消し用の放水器でびしょ濡れにしてやりたい。それは愉快だろう！消防隊は、すでに子ども頃から私の関心を引いていた(放水器 Feuerspritze は、男根 männliche Glied を表す最も普遍的な象徴の一つである)。
Rw : 清い Rein。Ra : 清い者には、すべてが清い。A : 私はいつも清潔な子どもであった。そのことで叔父から賞賛された。兄はだらしなかった(過度な、あるいは早期に現れる、汚れや無秩序に対する子どもの不寛容は、同性愛的固着の一症状である)(ザドガー)。

IV

私がここで簡潔に報告しようとする第四の症例は、純粋なパラノイアではなく、強いパラノイア的特徴を伴った早発性痴呆である。

本症例は、まだ若い一人の公立学校教員に関するものであり、——やや老けて見える彼の妻の話によ

れば——約一年ほど前から、絶えず自殺念慮に苛まれ、全世界から迫害され、告発されていると信じ込み、何時間とも思い悩んでいるという。

私は、寝床に横たわっているこの患者が覚醒しているのを見いだしたが、彼は頭を寝具の下に隠していた。私が彼と二、三の言葉を交わしただけで、彼は私に対して、医師として患者の秘密を守る義務があるかどうかを尋ねた。私がこれを肯定すると、彼は激しい不安の徴候を示しながら、自分は妻に対して三度クンニリングスを行ったのだと打ち明けた。彼は、この悪行のために人類から死刑を宣告されており、両手両足は切断され、鼻は腐り落ち、眼はえぐり取られるであろうことを知っているという。彼は私に、天井にある欠損してはいるが煉瓦で塞がれた箇所を示し、そこから自分の悪行が観察されたに違いないと述べた。彼の最大の敵である校長は、複雑な鏡装置や電気磁氣的装置を用いて、すべてを把握しているのだという。彼は、この倒錯的行為によって「eine die」(すなわち女性 eine Frau)になってしまったのだ。なぜなら、男はペニスによって性交するのであって、口によってではないからである。人々は彼のペニスと睾丸 Hoden を切り落とすであろう——あるいは、いわゆる「カポチャ頭 Kürbiskopf」全体を切除するであろう(「カポチャ頭」とは愚か者 Dummkopf を意味し、「カポチャ Kürbis」はハンガリー語の民間表現で睾丸 Testikel を指す)。

私が偶然に自分の鼻に触れたとき、彼は言った。「ええ、私の鼻が腐っている、とおっしゃりたいのでしょうか。」私が入室の際に「あなたはクレーグラー氏 Herr Kugler ですか」と言ったことに立ち返って、彼は次のように説明した。「私の名前の中には、すべてが語られているのです。私は、球 Kugel + 彼 er (= Kugler) 、すなわち、女 die + 彼 er、両性具有者 Mannweib なのです。」彼の名シャーンドル Sándor において、d'or、金、das Gold を意味するのだと彼は考え、すなわち自分は中性化された存在になった

のだという。彼はかつて窓から飛び降りようとしたことがあったが、そのとき「Hungad」という語が思ひ浮かんだという(huny = 目を閉じる、ad = 与える)。すなわち、彼は目を閉じる(= 死ぬ)ことで、「彼の」妻が他の男に「与える」(= 性交を許す)ことになる、というのである。人が自分についてそのようなことを考えないようにするために、彼は生き続けることにしたのだという。もっとも、彼が生きている間であつても、妻が他人に「与える」際には、彼は「目をつぶろうと」しているのだ、と考えることもできるであらう。

彼はこの倒錯的行為について、きわめて強い罪責感に苛まれている。このような倒錯性は、これまで彼には常は無縁のものであり、現在においても彼はそれを嫌悪しているという。この行為は、彼の敵が——おそらくは暗示 Suggestion によつて——引き起こしたのだ、と彼は考えている。

さらに執拗に問いたですと、彼が自分の校長(美しく、堂々とした人物)のために自己犠牲を払つてきたことがわかる。その校長もまた彼に非常に満足しており、しばしば次のように言つていたという——「あなたなしでは何も始められない。あなたは私の右腕だ」(これは「より良い半身 bessere Hälfte」を想起させる)。しかし約五年前から、その校長は彼を苦しめるようになり、彼が授業中、教室で詩の解釈に最も深く没頭しているときに、書類によつて妨害するなどするようになった、等々。

「ドイツ語を話しますか?」(tud nemetül)という問いに対して、彼は nemetül(すなわち「ドイツ語で」という語を分解し、次のように音節ごとに翻訳する。

nem = (取れ nimm)

et = (そこへ und)

ül = (座れ sitz) (ül = 座 sitzen)

すなわち、私の問いの意味は、彼が自らのペニスを手に取り、そのために座れ(穴の中に閉じ込められよ)ということだ、というのである。彼がここで明確に指しているのは彼自身のペニスであり、それを、敵たちの告発によれば、「別の穴」に差し入れようとしているのだという。別の穴——それは、他の、見知らぬ女性たちのことである。

彼は、妻を崇拜しているのだと厳肅に断言する。

彼の父親は貧しい召使い Diener であり(これは真実に合致する)、彼に対して厳格であった。彼は学生時代、いつも家において、母親に詩を読み聞かせていた。母親は常に非常に慈愛深い人物であったという。ここでは、長い間、自らの同性愛を幸福(幸運)に昇華していたひとりの男性が問題になっている。しかし、かつて崇拜していた校長との失望体験以後、彼はすべての男性を憎むようになり、その憎悪を正当化するために、あらゆる表現、あらゆる身振り、あらゆる言葉を、迫害の意図としての意味で解釈せざるを得なくなった。彼はすでに私(フェレンツィ)をも憎んでいた。すなわち、私のあらゆる言葉や身振りを敵意あるものとして解釈し、分解し、翻訳し、歪曲し、ついにはそれが敵対的な仄めかし Anspielung となるまで、あらゆる語を処理したのである。

患者の母親は私に、息子は常に行儀のよい子どもであったと語った。ほかの子どもたちと遊ぶ代わりに、彼は母親に本を、とりわけ詩を朗読し、その内容を説明していたという。父親は単純労働者であり、時に少年に対してやや粗野に振る舞うこともあった。「母子が共に読書をしている最中に父親によって邪魔されると」、彼はしばしば苛立ちを覚えた。⁽⁸⁾

疑いなく、この患者は——知性的(精神的)には自分が凌駕していると感じていた——父親を低く評価しており、より立派で見栄えのする父を渴望していた。そのような父を、彼は後に、自分の上司である

校長の人格の中に見いだした。彼はこの校長に対して、長年にわたり疲れを知らぬ勤勉さをもって奉仕したが、その校長は、(確実に過度に高められていた)患者の期待を満たすことはなかった。そこで彼は、その愛を再び女性へと戻そうとしたが、女性はその間にすでに彼にとって「中性体 Neutrum」となっていた。異性愛的な誇張やクニリングスは、女性に対する欲望の欠如を患者自身から覆い隠すことはできなかったが、男性性への憧憬は消失することがなかった。それはただ自我―意識から追放されただけであり、否定的な快感標識を伴った投影として、再び自我―意識へと回帰したのである——彼は迫害される者となった。

*

こゝで報告した症例のほかにも、私はさらに三名のパラノイア者⁽⁹⁾について「分析的既往歴 analytische Anamnese」を採取した。その三例すべてにおいて、投影された同性愛的欲望が最も重要な役割を果たしていた。しかし、これらの症例からは本質的に新しい知見を得ることができなかったため、私はそれらについて詳細な記録を残さなかった。

しかしながら、ここに公表された症例報告だけでも、以下の推測を正当化するに足るものである。すなわち、「パラノイア」の本質とは、かつての同性愛的な快の対象に対し、昇華されないままのリビドーが再備給されることにある。自我は、投影メカニズムの助けによってこの状態から身を守っているの

ある。

この過程を確定することは、われわれを当然ながら、より大きな問題、すなわちフロイトのいう「神経症選択 Neurosenwahl」の問題へと導くであろう。すなわち、幼児期の両性性 Doppelgeschlechtlichkeit — アンビセクシュアリテイ Ambisexualität⁽¹⁰⁾ — から、正常な異性愛の優位が成立するか、それとも同性愛神経症あるいはパラノイアが生じるか、を分かつ条件とはいかなるものでなければならないのか、という問いである。

解題

本論文はまず一九一一年の *Jahrbuch für psychoanalytische und psychopathologische Forschungen*, 3(1), pp. 101-119 に掲載され、その後一九二七年の *Bausteine zur Psychoanalyse I Theorie*, pp. 120-144 に収録された (Internet Archive で閲覧可能: <https://archive.org/details/BausteineITheorie>。論文の開始ページ p. 120 に一九一三年とあるが、おそらく一九一一年の誤記だと思われる)。一九一一年の *Jahrbuch* の同号にはフロイトのシュレーバー症例 (「自伝的に記述されたパラノイアの一症例に関する精神分析的考察」) も掲載されており、精神分析における精神病理論の練り上げが、フロイトとその同僚たちの間での共同研究として行われていたことがうかがえる。本論文は、パラノイアにおける「同性愛」の契機が本質的意義を持つものであることを四つの症例を通して示しており、フロイトのパラノイア論を補完する内容となっている。フラン

スでは、フロイトのシュレーバー症例はマリ・ボナパルトとルドルフ・レーヴェンシュタインによって翻訳され、一九三二年に *Revue française de psychanalyse*, Tome V, n°1 に掲載された。本号には同時にフェレンツィの「パラノイアおよびパラフレニーにおけるいくつかの臨床的観察 *Einige klinische Beobachtungen bei der Paranoia und Paraphrenie*」(1914)の仏訳も掲載された。ジャック・ラカンは同一九三二年に出版された学位論文『人格との関係からみたパラノイア性精神病』の中でフランスへのこの輸入をいち早く押さえており、第二部第四章第二節、脚注(12)には、仏訳されたシュレーバー症例、およびフェレンツィの本論文(「パラノイアの病因における同性愛の役割について」)への言及がある(Seul, *Points essais* 版, 1975, p. 261)。

なお、原文の隔字体(ゲシュペルト)は、傍点で示し、原語を併記する場合は斜体にした(鉤括弧などで強調を表現しているものもある)。訳語の検討・確認が必要と思われるものに関してはなるべく原語を併記した。訳者による補足は亀甲括弧(⌊)で挿入した。

(東京大学大学院人文社会系研究科倫理学研究室)

(1) Vgl. アブラハム Abraham, 「ヒステリーと早発性痴呆の心理・性的差異 *Die psychosexuellen Differenzen der Hysterie u. d. Dem. praecox*」(Klin. Beitr. zur PsA., Int. Psch. Bibl. Bd. XVI.)

(2) 「彼女が女中と二人きりでいたとき」彼女は「陰部にある感覚を覚え、その際、今この女中が淫らな考えを抱いているのだ、と思った。——彼女には「女性の裸体、ことに陰毛を伴った露出した女性の陰部の幻覚があり、ときには男性の性器の幻覚もあった。」——「彼女が女性と一緒にいると、決まって耐えがたい感覚を覚え、それに続いて、今この女性を卑わいな裸の

姿で見ているのだ、という解釈が生じたが、しかし同時に、その女性もまた彼女について同じ感覚を抱いているのだ、と考えた。——「女性の陰部の最初のイメージは、彼女が実際に浴場で女性たちが裸体になっているのを目撃してから、数時間後に現れた。」——「義姉妹がある発言をしたとき、彼女には『すべてが明らかに alles klar』なった」等々(Freud, S. Weitere Bemerkungen über die Abwehr-Neuroptosen [フロイト「防衛—神経精神症再論」, 1896, Ges. Schr., Bd. I, S. 378)。

(3) Jahrbuch f. PsA., II. Bd., S. 237.

(4) コンブダペストでは、住居の管理・雑務を、信頼できる夫婦に一任するという習慣が広く行われている。

(5) 反アルコール主義者たちの一面的で扇動的な活動は、アルコール依存がほとんどすべての場合において、神経症の原因ではなく——たしかに破局的ではあるが——結果であるという事実を覆い隠そうとしていた。個人的アルコール依存であれ社会的アルコール依存であれ、それを治癒しうるのは分析のみであり、分析こそが麻酔 Narkose への逃避の原因を暴き、中和するのである。軍医少佐ドレンクハーン博士は、ドイツ軍の罹患統計にもとづき、近年の反アルコール宣伝活動の結果、軍隊における「アルコール疾患」の数が一万人当たり 4.19 から 0.7 へと急激に減少した一方で、その他の神経症および精神病の疾患数が同程度に増加したことを証明した(ドイツ軍医雑誌, 一九〇九年五月二〇日)。したがって、アルコール依存の根絶は衛生状態の改善としては見かけにすぎない。心にとつて、アルコールが取り去られたときには、病への逃避のための数多くの別の道が開かれているのである。そして、精神神経症者たちがアルコール依存の代わりに不安ヒステリーや早発性痴呆に罹患するようになるならば、誤った場所でアルコール依存に向けて動員された膨大なエネルギーの浪費が惜しまれる。

(6) この事例については、私はすでに別の関連で簡単に述べたことがある。『取り込みと転移 Introjektion und Übertragung』を参照せよ(本巻の p. 9 以下)。

(7) $Rw \parallel$ 刺激語、 $Ra \parallel$ 反応、 $A \parallel$ 分析。

(8) したがって、後年になって校長によって彼の講義(朗読)が妨害されたことが、彼にとつてトラウマ的な力をもつに至った理由も、ここにある。

(9) 一名は嫉妬妄想患者、残る二名は好訴妄想者 Querulanten であった。後者のうちの一人である技師は、次のような訴えをもって私のもとを訪れた——「ある特定の男たちによって、正体不明のやり方で、自分の男性力 Manneskraft が性器から吸い取られているのだ」。

(10) 私は心理学において、「両性愛的素質 bisexuelle Anlage」という表現の代わりに、「アンビセクシュアリティ Ambisexualität」という用語を用いることを提案したい。この用語によって示唆されるのは、われわれがこの素質(ディスポジション)のもとに理解すべきなのは、生体内に男性的・女性的な物質(フリース)が存在すること、あるいは精神内に男性的・女性的なリビドーが

存在することではなく、むしろ、子どもが——本来は対象をもたない——そのエロティックErosを、男性へ、女性へ、あるいは両性へと向けうるといふ心理的能力 *psychische Fähigkeit*、すなわち、いずれか一方の性、あるいは両方の性に固着しうる能力なのである。